

博多とアジアの映画(68)

松 浦 仁

平成6年、福岡市は年間降水量が福岡管区気象台の観測史上最も少なく、昭和53年に経験した福岡大洪水を上回る295日間に及ぶ給水制限がおこなわれた。そんな水不足の中で、「アジアフォーカス・福岡映画祭」⁹⁴は開催された。9月9日から18日まで、ソラリアシネマ1、ニュー大洋2、明治生命ホールの3会場で20作品が上映された。

これまでアジアの知られざる国の映画を取り上げた特別プログラムは、スリランカ特集で、上映されたのは以下の7作品だった。

「運命線」(1956、監督 レスター・ジェームス・ピールス)
 「変革の時代」(1982、監督 レスター・ジェームス・ピールス)
 「日が沈むところ」(1994、監督 レスター・ジェームス・ピールス)
 「長女」(1993、監督 スミトラ・ピールス)
 「その橋の下で」(1990、監督 プレーマラトゥナ)
 「大都会」(1993、監督 H.D. プレーマラトゥナ)
 「蓮の道」(1987、監督 ティッサ・アバーセーカラ)
 スリランカ映画の巨匠監督として、スリランカの映画界を牽引してきたレスター・ジェームス・ピールスの長編

劇映画1作目である「運命線」、スリランカの映画が日本で初めて上映され、スリランカ映画の存在を世界に知らしめた「ジャングルの村」と同時期に製作された「変革の時代」、そして最新作の「日が沈むところ」の3作品がピールス監督に敬意を表するかのようにな上映された。

ピールス監督は、1919年にスリランカの首都コロンボに生まれ、イギリスで映画の製作を学んだ。帰国後、セイロン政府映画部で助手として働き、1956年に初めて長編劇映画を製作した。それが「運命線」だった。村にやって来た旅芸人が、盗まれそうになった財布を取り戻してくれた少年の手相を見て、将来病気を治せるパワーが宿るが災難もふりかかると予言して去っていく。

村の生活をリアルに描いた抒情詩のよつなモノクロ映画だった。「運命線」は、スリランカの伝統文化に根ざした、スリランカ人によってスリランカで製作された最初の劇映画であり、スリランカの映画界はこの作品を基点にして発展を遂げた。

1982年に製作された「変革の時代」は、スリランカの著名な小説家マーティン・ウィクラマシンハの小説をもとにした3部作の2作目だった。金儲

けと地位にしか興味のない父親と社交界のことしか頭にない母親に愛想をつかした長男が、結婚してイギリスで生活するが、妻は亡くなり悲劇に見舞われる。広大な茶園を経営する上流階級が、富と権力を握ってきたスリランカ社会の実態を背景にした大河ドラマだった。

そして、1994年製作の「日が沈むところ」は、一代で財を築いた実業家の3人の子どもの結婚を機に父親の財産をめぐる骨肉の争いを演じた挙句、自殺したり発狂したり殺し合いに発展していく悲劇の物語だった。

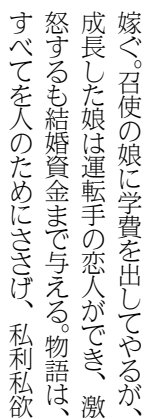
レスター・ジェームス・ピールスの夫人であるスミトラ・ピールスは、スリランカで唯一の女性監督だった。「運命線」に強い衝撃を受け、編集者として映画界に入り、1978年に監督デビューした。1995年から5年間、フランス大使、スペイン大使、ユニセフ大使という経歴をもつ。

1982年に製作した「川のほとり」には、国際交流基金が開催した映画祭「南アジアの名作を求めて」に出品し、レスター・ジェームス・ピールス監督の「ジャングルの村」とともにスリランカ映画の評価を高めた。

スリランカが、「アジアフォーカス・福岡映画祭」でベトナム、モンゴルに

1990年製作の「その橋の下では」は、服役中の夫を待ちながら苦しさに負けず日々の生活を送り、一人息子を育てている気丈な女性の物語だった。1993年製作の「大都会」は、ひとりの女性の厳しい人生体験を社会的文脈のな

1987年製作の『蓮の道』は、その年のスリランカ映画賞を受賞し、モスクワ映画祭をはじめ世界の映画祭で絶賛をあび、スリランカ映画の傑作とされている。レスター・ジェームス・ピール監督の『変革の時代』と同じ原作者のマーティン・ウィクラマシンハが、1956年に書いた小説『ウィラーガヤ』(シンハラ語で欲望からの解放あるいは執着心がない人という意味)をティッサ・アペーセーカラ監督が20年の時を経て映画化した。(『蓮の道』の原題もこの小説と同じ。)



「アジアフォーカス・福岡映画祭⁹⁴」における「スリランカ映画特集」は、スリランカの映画史を俯瞰できる秀逸のプログラムだった。そして、福岡で上映した日本語と英語の字幕がついた7本のフィルムは世界各地で上映され、スリランカ映画の存在を世界に知らしめた。